

# 遺品整理「悩まないで」

## 専門家の育成団体 最寄りの業者紹介

1人暮らしの高齢者が増え、亡くなった後の居宅で遺品やごみを片付ける業者への関心が高まっている。家族が二の足を踏むほど大量の品が残されるケースもあり、清掃の専門家を育成する一般社団法人「事件現場特殊清掃センター」（北海道千歳市）は「悩みを抱え込まず、相談してほしい」と呼び掛ける。

昨年の9月中旬を最後に、壁に掛かったカレンダーへの書き込みはぴたりと止まっていた。北海道空知地方にある築35年の2階建て住宅。高齢の夫婦が暮らしていたが、夫が認知症のため介護施設に入所し、妻が家に残った。その後、妻も体調を崩して入院、帰宅することなく亡くなった。

40代の娘が無人になった家の掃除を始めたが、いくつかの部屋は天井近くまで物が積み上がり、足の踏み場もなかった。作業ははかどらず、北海道滝川市の遺品整理業者「虹の架け橋」が依頼を受けた。

統括責任者の佐藤勇大さん(32)は作業員5人が4日かけて清掃。「写真は全て捨ててほしい」との依頼だったが、書道作品を前に誇らしげな表情を見せる夫の写真を残した。娘は「お願いして本当に良かった」と涙を浮かべて喜んだという。

虹の架け橋は、佐藤さんが、一昨年10月、運送会社を営む母裕美さん(56)と立ち上げた。祖父宅の遺品整理をした約10年前、家族だけの作業に限界を感じたことがきっかけだった。

「ごみに思える物にも思い出が詰まっっていて、家族では作業が進みにくい。部外者が片付けることで気持ちを整理する分岐点にしてみれば」と佐藤さん。

事件現場特殊清掃センターは2013年に設立。虹の架け橋のような全国の清掃業者が300社ほど登録しており、同センターが依頼を受けて最寄りの業者を紹介する。問い合わせは同センター、電話0123(42)0622。